すくも自主防災会だより　第21号

小筑紫地区の自主防災

【1】地震・津波に弱い地盤

自主防災といっても未だ「日暮れて道遠し」というのが小筑紫地区の実態である。

熊本地震が発生した時には、これが南海トラフ巨大地震を誘発するのではないかと自主防災会長という立場からも随分心配したが、誘発される気配もないので安心していたところ、地震学者や防災講演者の話を聞いて、これが全く真逆であることを知った。つまり、フィリピン海プレートの先端はもうこれ以上沈み込めないところまできており、その圧力が熊本にある活断層を動かしたのではとのこと。つまり、熊本地震は南海トラフ巨大地震の前兆地震ではないかというのである。これが事実であれば、南海トラフ巨大地震の発生は既に秒読み段階に来ているのではないかと講演を聞きながら鳥肌が立つ思いがした。なぜなら、小筑紫地区の土地は旧小筑紫分校から間口にかけての海岸通りは全て昭和21年に発生した南海地震以後数十年をかけて埋め立てた土地であることから、予想される地震が発生したら、この埋立地全域は間違いなく地盤沈下と液状化現象が起こる。小筑紫地区には逃げ場がないのである。

【2】ハード面の整備が急務

小筑紫地区の避難場所のうち、3カ所へ市に備蓄倉庫を設置してもらっているが、その中の1カ所の避難路の上り口にある廃屋は大地震発生後、倒壊し、避難経路を塞ぐ可能性があるため、取り壊しの補助金を申請しているがまだ対象になっておらず対応できていない状況である。また、国道321号バイパスの建設は地域住民の命綱であり、以前から行っている陳情も今年で19年目となるが、これも未だ微かな光さえ見えていない現状である。

1707年に発生した宝永の大地震はM（マグニチュード）8・4程度であり、小筑紫地区は亡所（全滅）との記録が残っているが、必ず発生する次の南海トラフ巨大地震はM9以上の可能性もあるといわれている。

マグニチュードが1増えると地震のエネルギーが32倍になるとのことで、将来とてつもない巨大地震に襲われると予想されるが、二次避難所へのアクセス道路は今のところない状況であり、小筑紫地区は、まったくの陸の孤島になってしまう。

【3】地区でできる取り組み

(1)津波避難訓練を兼ねた炊き出しお花見

地区住民の親睦を兼ねながら津波避難と共助の意識を高めるため、毎年4月の第一日曜日に、小筑紫基幹集落センターでお花見と避難訓練を兼ねて行っている。

地区に居合わせた人を対象とし、正午のサイレンを合図に避難を行い、炊き出しのものを食べながらお花見を楽しむ催しである。

※昨年から訓練に際して傷害保険を掛けている。

(2)備蓄倉庫への備蓄品

市が配布している備蓄品以外に、飲料水2ℓ×6本入り200箱を想定避難者数に応じて、それぞれ備蓄倉庫に配分していく。小筑紫小・中学校の避難場所となる尾崎山の備蓄倉庫まで運び上げる作業は先生方や中学生にも手伝ってもらうこととしている。また、自主防災会としても独自に備蓄倉庫を避難場所へ設置し、併せて衣装ケースや防虫剤などを準備し、衣服や毛布、新聞紙などを収納している。

地区の広報や放送を通じて各家庭で出来る準備を日頃から呼びかけているが、避難場所でのトイレの問題やテントの購入についても検討している。

(3)防災活動の役割分担

自主防災会の組織は、会長、役員、班長（地区に14班）から構成されており、行政や消防団との連携、住民の避難誘導や情報収集など、それぞれが役割分担を行うことで防災活動に取り組んでいる。

地区民には地震・津波以外の災害にも備えるため自主防災会の組織図を配布しているが、10年以上前に作成したものであるため、新たな災害想定なども踏まえ、早急に検討し直す予定である。

【4】学校との連携

地区にある小筑紫小学校、中学校の子どもたちの命を先生達と協力してどのように守るかは、地区を預かる自主防災会長の至上命題の一つと思っており、学校の防災会議へ参加する中で、過日行われた小学校防災キャンプへの参加と物資支援、そして日頃からの避難場所の確認など、学校と連携して子供たちの命を守る対策を行っている。

【5】今後の課題

小筑紫地区の今度の課題としては、個人の防災意識の向上を図りながら、小中学校とさらなる連携を行う中で、備蓄食料の購入等自主防災会としてすべき取り組みを早急に実施していきたいと考えている。

小筑紫地区自主防災会
会長　小海　苗実